

ざしきのぼり  
座敷幟

昭和時代  
松江歴史館蔵



ここ出雲地方の端午の節句は、現在でもひと月遅れの6月5日に行うところが多く、以前は鯉のぼりとともに勇壮な武者や武内宿祢(たけうちのすくね)を描いた大きな武者幟を立てていました。

武者幟を立てることのできない家庭では、屋内の床の間などにミニチュアの幟を飾っていたのです。今回紹介する座敷幟は松江の商家が持っていたもので、家紋の入った幟や煌びやかな馬幟や槍とともに「鐘馗(しょうき)」を描いた幟が立っています。

「鐘馗」とは中国の神様で、唐の玄宗が病床に臥していた際、夢の中に「鐘馗」が現れ、鬼を退治しました。夢から覚めると急に病気が癒えたという伝説があり、そこから「鐘馗」は病気を払う神様として人々から信仰されたのです。

私たちの先祖は、端午の節句に鐘馗様を描いた幟や掛軸を飾って子どもたちの健康を願っていました。家を探せば、鐘馗様を描いたものがあるかもしれませんね。